

赦しと不寛容

諸橋泰樹

9・11以降、というわけでは必ずしもないが、自身の中で、「不寛容」ということがキーワードになっている。2001年9月11日以降の米国や日本のあり方を見て、そしてそれに喝采する両国国民を見て、渡辺一夫のことばを思い出したからである。

渡辺は、朝鮮半島における戦争を契機に日本が「逆コース」をたどり始めた1951年に、次のように書いていた。「過去の歴史を見ても、我々の周囲に展開されている現実を眺めても、寛容（トランス）が自らを守るために、不寛容（アントランス）を打倒すると称して、不寛容になった実例をしばしば見出すことができる」

「不寛容に報いるに不寛容を以てした結果、双方の人間が、逆上し、狂乱して、避けられたかもしれぬ犠牲をも避けられぬことになったり、更にまた、怨恨と猜疑とが双方の人間の心に深い褶を残して、対立の激化を長引かせたりすることになる」と述べ、彼はこう言い切ったのだから。「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容たるべきでない」。

9・11をきっかけに、3人のボランティアがイラクで人質となり、捕まったのは「自己責任」であり、国は救出なぞ税金の無駄遣

いだからする必要はないとの意見が、ネットやテレビで燃えさかり、空港に彼ら・彼女らを糾弾する人びとが押しかけた。小泉純一郎は、「成功者をねたむな」と言って高齢者と障がい者を切り捨てて格差社会を推し進めた。殺人者に死刑をの聲は、世界の他国にもましてこの国ではかまびすしい。ワールドカップにおける“ぶちナショナリズム”はとどまるどころを知らない。

一方で、アウシュビッツとビルケナウのユダヤ人絶滅収容所跡、韓国の独立記念館、韓国のナヌムの家、広島原爆資料館、沖縄の平和祈念資料館、中国の南京虐殺記念館などは、それぞれの迫害の歴史を刻みつけつつ教えつつ、「寛容」と「不寛容」のあいだを揺れている（あるいは「不寛容」を貫いている）。もっとも、広島平和祈念公園の「安らかに眠って下さい／過ちは繰返しませぬから」という碑文は、寛容のことばなのだろうか？

しかし米国の絶対的悪は、赦されるべきではないだろう。韓国や中国が日本軍の虐殺行為を赦すはずはないだろう。我われは、「赦さないこと」と「寛容」を両立させつつ、「寛容」を鍛えてゆく必要があるのではないかと思っている。